

# H1N1パンデミックと広報・報道

朝日新聞 編集委員 浅井文和

2010年4月12日

第2回新型インフルエンザ(A/H1N1)対策総括会議

# 新感染症学

## インフルエンザ

時としてその中で繰り返り発生する病を起すこともある細菌やウイルス。昨年夏には例年より大規模の「オーストリヤ」が集団感染を引き起こした。戦後、結核を激減させ、天然痘を根絶して一息を吐いたわが国は感染症に「勝利」したかに思えたが、見えない敵は想像以上広げた。その細菌やウイルスのしつこい生存戦略が最近の研究で明らかになってきた。感染症研究の最前線を報告する。まず冬に起発化するインフルエンザの動きからみてみる。



新型ウイルス発生地として中国南部が有力視されるのは、豚と人間の距離が近しい。農家の畜舎では豚が簡単に餌に飼われていた。

## ブタ体内で新ウイルス?

中国農家畜産局が設置する広西チワン族自治区。区都・南寧から車で約二時間、パナオヤサトウキビが植えられた亜熱帯の畑の間を車で走り抜ける。昨年十二月中旬、国立予防衛生研究所(漢口)の感染症総局・呼吸器科ウイルス学研究室長、同自治回復生防護センターの陳輝ウイルス部長ととも、西部の農村地帯を訪ねた。

農家の中庭で子どもたちが遊ぶ中、ニトリは放し飼いで、住宅をかき分けはぐれた鶏の隅にはフックリトフックリと餌を啄つた。一角があり、その一角が卵が飼われていた。案内役の趙健生(趙)博士は多くの豚が豚舎を数匹飼っている。豚はたいては数年飼われて置かれていたが、最近では二、三年で屠殺されてしまっているという。インフルエンザウイルスの研究室に趙博士は在籍せず、研究所から、趙博士とフックリトフックリを共に歩くのは毎日、趙博士を探るための毎日だ。



根除総室長(左奥)の指導で新型ウイルス検査の研究を受ける中国の研究者ら。いずれも昨年12月、南寧市などで、鏡写す

雲南、広東省と中国南部を中心に調査続けている。根除総室長は熱心に話をつけている。豚と人間の関係。世界的な流行をもたらし、新型のインフルエンザウイルスを豚が生み出すために使った。A型かB型であるインフルエンザウイルスのうち、最もよく流行するものがA型。その人間型は、一九三三年に発見されたが、豚型はその三年前に発見されている。豚や、カニ、ヒル、ニトリなどの鳥類も感染する型も確認されている。さらに二〇年代に香港大の

## ヒト型と鳥型が交雑

K・P・ショートリッジ教授が、中国各地で「普通のウイルスは遺伝子が一本だがA型インフルエンザウイルスは八本の遺伝子を持っている」と報告したが、豚は人間型も鳥型も交雑して変身することを大流行を起す」とある。

七〇年代後半には、インフルの研究によって、世界的に大流行した香港型(一九六八年)のウイルスと、その前に流行したアジア型インフルエンザを比べ、八本の遺伝子のうち六本が共通し、残り二本は鳥のウイルス代前半、中国南部で豚を通じてショートリッジ教授は〇二年

を言語学博士の中村久教授(ウイルス学)は九九年、遺伝子の進化の速度から鳥型ウイルスが生まれた時期を算した。その結果、鳥と豚のウイルスが交雑して六七七に豚型の中に生まれた推定時期は、夏にウイルスが

「要警戒」H7N1 次の流行がはじまりつつあるのか、根除総室長や中野教授が警戒するのは鳥で流行してきたH7N1型が人間に入ってくる。豚が強く「トリバスター」とも呼ばれる、種々のニトリを交雑させるほどの経験をもち、ショートリッジ教授は九五五年、中国南部の豚からH7N1の抗体を見つけたと報告している。

可能性が高いことを指摘した。その理由として挙げられるのが、人間と豚、アヒル、ニトリなどが近くで暮らしている生活様式だ。豚は豚舎、ヒルはヒルのウイルスを食んでヒルを飼育し、人間からヒルが豚を飼育する、というわけだ。もう一つの理由として、根除総室長は中国での年間のインフルエンザ流行パターンに注目する。インフルは南半球では春秋小さな流行がありながら年間を通じてウイルスが見つかるとし、また集中して流行し、夏にウイルスが

# 私が過去に書いた記事

1997年1月10日

# 朝日新聞 科学面

インフルエンザの大流行。インフルエンザは十一年から数十年に一回の世界的大流行を起す。今世紀最大の流行は一九一八年からのスペイン風邪。当時の死者は約二千万人が死した。

によると日本国内の患者は白の四割の約千四百五十人、死者約三十九万人にはなっていた。戦後最大の流行は一九七七年のアジア風邪に引き続き、米国内では約二千万人が死した。

計で届け出患者が九十八万人、死者約七千七百八十人、六八年の香港風邪は日本ではほとんどの大流行に及ばなかったが、米国では約二千万人が死した。

「警戒が必要な時期はいつになるのか。その点を根除総室長は強調する。中国南部ではインフルの大流行と共通して、新型ウイルスを見つけたのは検査方法の研究をめぐり、新型ウイルスを調べる研究を今から始める。」(漢井 文和)

「新型感染症学」は折田金隆日刊掲載します。

# H1N1インフルエンザの初期報道 (2009年4月、メキシコ・米国で患者)

一体、何が起きているのか、どうなっていくのか？  
正確な記事を書くため科学的な状況判断に専念した

- 頼りになったのはWHOの電話記者会見
  - 対策の責任者であるケイジ・フクダ博士らが事実とWHOの対処方針を世界の記者に直接説明し、質問に答えた
  - 取材チームでWHO担当記者を決めて会見を聞き続けた
- WHO、米国CDC、英国保健省などのWeb
- 医学誌 ***New England Journal of Medicine*** 等
- 国内専門家の意見 ウイルス学、臨床、公衆衛生
  - WHOやCDCから直接情報を得ている専門家が的確

# では、日本のケイジ・フクダ氏は？

- 事実と対策を、科学的に、責任をもって語るスポークスパーソンが見えてこなかった
- 「日本政府の情報提供はひどくないか？」  
(2009年4月30日時点、私の個人的メモ)
  - 政府関係者が部署ごと人ごとばらばらに違ったことを言っているのか？
  - 米国の[www.pandemicflu.gov](http://www.pandemicflu.gov)のようなインターネットを通じた一元的な情報提供は日本でもできないのか？

# 「強毒」「弱毒」というメッセージのぶれ

- H1N1の重症度が国民の注目点。統一した言葉で語ってほしかった。しかし、「強毒型」「弱毒型」という言葉の定義がぶれたまま使われメッセージが混乱した。
- ウイルス学者は、H5N1鳥インフルエンザを「強毒型」、H1N1を「弱毒型」と区別していた。（HA開裂部位のアミノ酸配列の違い）
- 一方、政府関係者でも、「スペイン・インフルエンザは最初は弱毒であったのが強毒化した」と説明する人がいた。
  - 「重症度(致死率)が低かったのが、(何%に)高くなった」が妥当。
  - スペイン・インフルエンザH1N1は、ウイルス学的には「弱毒型」。
- 受け手は、H1N1が「恐怖のウイルス」になる不安を感じる。
- 米国では重症度で語られ、このような混乱は見られなかった。

# 一般向けの平易な発信をした米CDC

- 新聞記事では、病気の説明や、予防対策などは米CDCのWeb情報を参考に書いていた
- 専門家向けのガイドラインだけでなく、一般市民向けに具体的にわかりやすく説明していた
  - 感染経路と予防方法、手洗いの方法
  - 病気の症状、ハイリスク者、治療方法など
- 日本の政府系Webも平易な一般国民向け情報を早く提供できるように工夫してほしかった

# 国立感染症研究所の情報提供

- 専門家と記者の意見交換会が有効だった
  - パンデミック前から感染研の専門家と記者との間で感染症に関する意見交換会を開催していた
  - 豚インフルエンザH1N1の発生で頻繁に開催→科学的でわかりやすい記事に繋がった
- サーベイランス情報の提供 現状把握に有効
- 家庭でできる予防法などを、子どもでも理解できる親しみやすい動画番組

# 新聞での情報伝達の工夫

- マスク姿の写真を頻繁に載せて良いのか？
  - マスクをつけている人々の写真が頻繁に載った
  - 街ではマスクの品薄が起きている
  - そもそも、普通のマスクは感染予防になるか？
  - では、手洗いの写真を載せよう
- 小さな連載記事で継続的に事実を伝える
  - 「よく効く知識」(19回、大阪本社版)
  - 「新型インフル ワクチン」(24回)
  - 「新型インフル どう対応」(22回)



# H1N1パンデミック発生前の理解

これから起こってくるパンデミックがどんな事態になるのか、国民に正しく伝わっていたか？

必要以上に恐怖感を煽ることはなかっただろうか？

訓練も「恐怖のウイルス」の想定だけで良かったのか？



第4回新型インフルエンザ対策総合訓練、愛知県で=2009年1月、浅井撮影 9

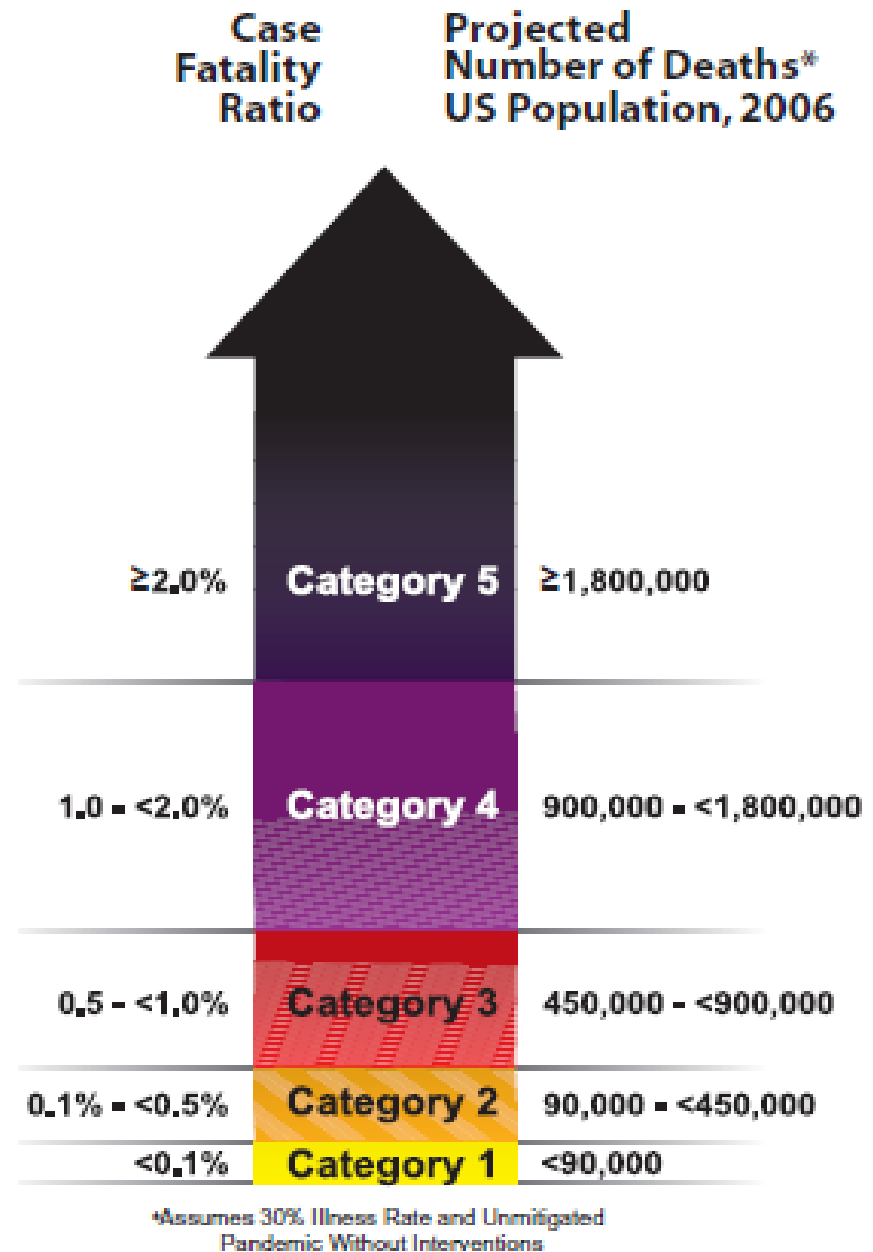
# 国の総合訓練（2009年1月13日）

- 第4回新型インフルエンザ対策総合訓練
- 愛知県・知多厚生病院で実動訓練を実施
  
- 場面① 最初の患者発生（海外から帰国）
- 場面② 発熱外来で患者の振り分け
  - 患者数は8人 1人ずつ医師の診察を受ける
  
- 患者が多発する事態を想定した訓練はなかった  
→パンデミック訓練なら、これが必要ではないか？

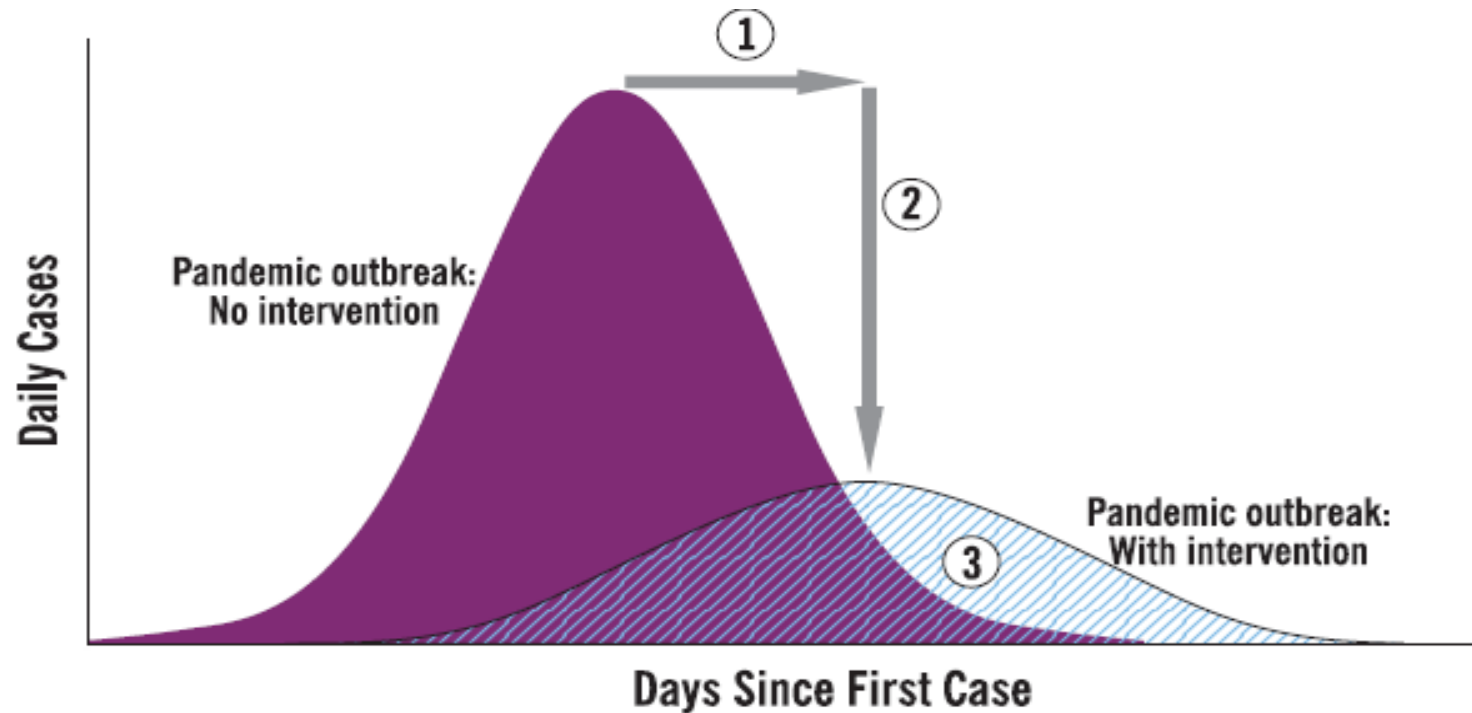
# 米国の被害 想定は5段階

- 重症度の事前  
予測は不可能
- 致死率2%以上  
スペインかぜ級
- 0.1~0.5%  
アジアかぜ級
- 0.1%以下  
季節性並み

CDC: Interim Pre-pandemic Planning  
Guidance: Community Strategy for  
Pandemic Influenza Mitigation in the  
United States, 2007



# パンデミック対策の基本は「封じ込め」 ではなく、被害軽減 (mitigation) 流行のピークを下げ、遅らせる



季節性インフルエンザでやっている対策の延長線上にパンデミック対策を置く